

自己愛人間～現代ナルシズム論～

21172748 平野可奈絵

本書は、精神医学者であった小此木啓吾による、国家、社会、組織とのかかわりを論じたモラトリアム人間論、人と人のかかわりを論じたシゾイド人間論、そしてより心理学的な心の動きの現代的な性格をテーマにした自己愛人間論へ、という現代人の心理構造に関する一連の研究の所産である。本書で筆者は、”自己愛人間”という観点から、一個人の心の内面からの人と人とのかかわり、社会心理、日本人論に至るまで、人間の心がかかわるすべての各領域を、一貫して展望しようとしている。

「自己愛人間は自己愛が病的に肥大化した人間である」

これは本書で繰り返し述べられる筆者の言葉である。この自己愛とは一体何なのか。また自己愛人間による現代社会、日本とはどういったものなのか。どのようにして現代社会の人々は自己愛人間になってしまったのか。これらのことが筆者の観点で五部構成にわたり語られている。

第一部では、まず人間の根源的自己愛について述べられている。自己愛と聞いて、所謂自分のことが大好きなナルシストのことを連想するかもしれないが、「自分だけは特別だ」という気持ちは誰にでも潜んでおり、この微妙な気持ちこそ、もっとも基本的な自己愛心理だと筆者は言う。そして、健康な人間というのはとても楽天的で、おめでたくて自己愛的なものである。多くの困難に耐えて生き抜くことのできる、常に希望を見失わない人物ほど、この種の自己愛は巨大で豊かなのだ。自分が大事なナルシストは悪い風に聞こえるが、むしろ生きる上で自己愛はプラスに働く。このように、第一部では自己愛というものは誰しものが無意識に抱えるものであり、また生きる上でのガソリンのように大切なものだと言われている。だが、自己愛は肥大化しすぎると、自己愛の中に立てこもって、本当の意味での現実との接触や生き生きとした情緒的な人とのかかわりを避けて暮らすようになる。そして現代社会ではこのような人々が増えてきている。ここで出てくるのがどのようにして現代社会の人々は自己愛人間になってしまったのかという本書のテーマである。

第二部では、自己愛の構造、その成り立ちと満たし方について述べられている。ここでのキーワードは「自我理想」、「超自我」、「理想自己」である。自己愛の満たし方の第一は、子どもの中にできあがった自我理想と現実の自分が一致することによって得られる自己愛の満足である。この自我理想について、筆者は自分が医者を目指すにあたって、医者の父がいたことを例えに説明している。このタイプの自己愛の満たし方の特徴は、第一にもととは自分の外の対象であった理想化された父親像が自我理想になって、心の中に内在化して、自己愛を満たすための一つの精神構造をつくりあげているということである。そして自我理想型の人間というのは積極的なものであり、対照的に自己愛を傷つけないために受身的な気持ちで行動するのが超自我型の人間であると筆者は言う。

この自我理想に対して、自己愛の成り立ちそのものと深く関係しているのが「理想自己」である。まさに自己愛そのもののような自己像で、自分の中で主観的につくりあげたものであり、それに自分がいつも一致することを求めているのである。理想自己と自我理想の区別は現代人の自己愛のあ

り方と、かつてのアイデンティティ人間の自己愛のあり方のちがいを理解するうえでとても重要である。

第二部までは予備知識としての内容が多いが、第三部でようやく現代社会と自己愛人間について述べられる。現代はお互いの自己愛を尊重する社会であり、かつてのアイデンティティは失われ、自己愛だけが信じられるものになっていることを、いくつかの映画の話、またその中でも「カサブランカ」を見た現代人である筆者の娘との解釈の違いを交えて説明されている。筆者のような昭和一ケタ世代には、カサブランカの主人公に対し、実際の自分には現実にはそんなことができるかどうかは別としても、この主人公にあやかりたいという理想像、第二部でも述べた自我理想があるためカサブランカを見て感動する。だが、筆者の娘のような現代っ子には自我理想がないが故に、主人公はナルシスティックで英雄ぶっているように見え、いわゆる「シラケ」につながってしまう。このように、筆者世代と娘世代、つまり現代社会の人々との違いが述べられている。そしてアイデンティティに代わる自己愛の満たし方や、いかに過去と現代の自己愛の満たし方がちがうか、さらにはかつての人々と現代人の死に方のちがいについても述べられている。自己愛の心理の中核には、「自分だけは特別だ」という全能感があるが、死はこの全能感を破壊する決定的なリアリティである。この自己愛の危機に対して、人間は多数にわたって、宗教・哲学・思想、あらゆる文化的な努力を傾けて対抗しようとしてきた。自ら死に場所を求める、といった死を自らのアイデンティティを確証する機会とするような、そうした理念的な意味づけを持った感動的な死を美化したり、理想化したりしたこのような人々に対し、今やアイデンティティを失った現代人の死に方は、裸の自己愛のままの受信的な死に方であると筆者は言う。

第四部では自己愛パーソナリティ、錯覚の中で暮らす人間について、「誇大自己」をキーワードに、長嶋茂雄をはじめ、有名になりたい美人という才能をもった女の子、幻想的な理想化した自分が崩れた結果無気力状態になってしまった二十二歳の青年、自己中心的でいつも自分のことを特別扱いしてくれないと気が済まず最終的に挫折した中年を例えに説明されている。現代は誇大自己ばかり肥大して、自己愛の満たし方がもっと超個人的な超自我や自我理想に発達しなくなってしまったともここで筆者は改めて語る。

そして第五部で、そんな自己愛人間の生態、自己愛人間が生きる現代、自分にとって都合の悪い、いやな自分を見まいという防衛機制が肥大した自己愛人間がなぜそうなるのかのプロセス等、健康的でない自己愛を抱えた現代の自己愛人間について深く追求し、語られている。さらに、男女の恋愛においても、お互いの愛と性のためだけでなく、その愛と性の営みを、どれだけ美しくあるいは格好よく自己愛を満たすためのものとして営むかという時代になり、自己愛人間は、自分の自己愛を満たすためにその人と付き合うのだというように、例を挙げて自己愛人間の対人関係について述べられている。最後に自己愛社会の日本のこれからがどうなっていくかについて、筆者が最愛の息子としているモンキーのぬいぐるみのハンスを例に、これからの私たちはハンスのような、死ぬこともなければ、生きてもない、純粹にイメージだけの愛の対象と、主観的な思い込みの中で共に暮らすようになるのではないかと読者に投げかけている。

私は、本書を読むことで、誰もがどこかで自分にぐさりと刺さる感覚をどこかで感じるだろうと思う。私自身、本書を読むことで、筆者の述べる錯覚がまさに目覚めた感覚に陥った。私が本書で一番刺さったのは、「自己愛人間は、主観的には本人は相手を一生懸命めんどろみたり、世話した

り、愛したりしているつもりである」という言葉である。私は自分が大事に思っている友達や、家族や、バイトの仲間に対して大事に思っているつもりであるが、それはそうしている自分が好きなだけで、勝手に自分が満たされているだけだったのではないかと落ち込みました。それほどまでに、本書で語られる自己愛は本当に身近なものであり、筆者が語る現代の若者に自分はぴったりとあてはまってしまうのである。自分自身が思う、自分に向けての愛とは何か、そして他人への愛は本当に他人に向けた愛なのか。このことが本書を読む上での私のテーマとなった。

だから私は、本書を私のような若者を含め、「自己」というものが固まってくる二十歳以上の所謂おとな達にぜひ読んでほしい。そして、本書を読む上での自分のテーマは何かを考えてみてほしい。本書によって自己愛というものに気付くのが早ければ早いほど、錯覚から目覚めた時のショックはそれほど小さくなく、立ち直ることも難しくなくなるであろう。本書の四部に登場してくるような挫折を味わうおとなになってしまったらもう遅い。これから新たな社会に出た時に、自己愛が原因で壁にぶつかるかもしれない。だが本書で得た予備知識によって受けるダメージもその時きつと和らぐのではないかと私は思う。

また、過去と現代の自己愛の違いについて嘆いているようでもある筆者に対し、否定的な意見を感じることもあるかもしれない。それもまた自分を見つめなおすということであり、他者への接し方を思い直す機会にもなるのではないだろうか。

参考文献：『自己愛人間』 小此木啓吾